

「親よりも、一日だけは長生きして いたい」と思う今日この頃

理事長 北岡賢剛



父親が3度目の手術（癌）を受けた。最初の手術は、15年前の大腸癌の手術だった。その大腸癌の治療中に、新しく胃癌が見つかった。転移ではなく、別のタイプの癌であった。大腸癌を治療中の父親に、このことを伝えるのがとても辛かったことを覚えていいる。父が横になっていいる布団と一緒に寝そべりながら、「辛いと思うけれど、生きて欲しいから手術をもう一度受けようよ」と言ったが、父は黙ったままだった。今、その父親が三回目の癌（膀胱癌）と闘っている。

父親は、中学校を卒業して、その後、三井鉱山の専門学校に進学した。16歳の時である。給料をもらいながら勉強ができた。第二次世界大戦後、中国の満州地方にある鞍山という町で小学生として楽しく過ごしていたが、敗戦となり「逃げる様に」家族の皆で船に乗り帰国したという。帰国した後に父親を亡くし生活が苦しくなり、三男であった父は、二人の妹のために進学を諦めて三井鉱山の炭鉱労働者として働くこととした。

いわゆる「読み・書き・そろばん」のお勉強はできた子どもだったという。同級生たちが高校へと進学して行く中、家族のために働くことを選んだ。炭鉱労働者の仕事は肉体的にも精神的にも重労働で、三交代という勤務が敷かれていて、朝、昼、夜と24時間体制で石炭を掘り出していた。海底の更にその下の400メートルに潜り、石炭を掘り上げるという仕事は想像するだけでも大変だっただろうと思う。日常的に落盤があり多くの従業員が、岩盤の下敷きになって命を失った。私の叔父も石炭の採掘中に落盤に遭い、亡くなった。また、昭和38年11月（私が5歳の時）には、死者458名、一酸化炭素中毒839名（今で言う高次脳機能障害の後遺症を負った）という犠牲者を出す大きな事故も起こった。炭鉱住宅街の中にあつた小学校（分校）に私は通っていたが、そのクラスメイトの中には、父親を落盤で亡くしたり、炭鉱での労働が原因で肺の病気を患うなど身体障害者として生きる父親を持つ友人が沢山いた。授業

の途中で校長先生が小走りに担任の先生に耳打ちすると、私は何となく嫌な感じがしたものだ。落盤という恐怖に加え、高熱多湿という労働環境から、精神を病んでしまう人もいた。父親は、そういう重労働に真面目に向き合いながら、独学でいくつかの国家資格を取得して行った。そんな父を見ながら私も幼い頃、大変だな……と思っていた。今も鮮明に覚えている父との風景がある。

私が大学の受験に2年も失敗し浪人生活をしていた時、大学生となつた友人たちが夏休みになると故郷に帰って来て、「飲みに行こう！」と誘いの電話があつた。そうすると、私は勉強を止めてさっさと出かけて行った。ある日、そういう私を心配して、母親が飲みに行くことにストップをかけたことがあつた。珍しいことだったが、2年も浪人している不真面目さを案じるのは当たり前だったが、それでも飲むことが好きだった私は、振り切つて出かけようとした。すると父親が走つてきて、「これ持つていけ」と一万円をくれた。「飲み会に行くぐらいだったら勉強をしろ！」と叱られるのかと思つたら、母に内緒で飲み代をそつとくれた。ダラダラと勉強もせずに過ごす息子の将来を案じていただろうけれど、そういう父の行為を今も不思議と想い出すことがある。

父が膀胱癌の手術を受けるために手術室に向かう時の表情が何とも言えなかつた。私たちに対して、心配するなという精一杯の表情を作りながらも、とても不安そうで怖そうでも、自分の運命の儚さでもいうようなものが、その表情に溢れていた。これからも忘れられないと思う。「大丈夫だから、頑張つて」心で呟きながら、軽く右手を挙げた。

東京で暮らす妹も、三回の手術の度に、忙しい仕事のやりくりをしながら駆けつけた。妹は父親の傍にずっといて、長くダラダラと続く父親の話にニコニコ笑いながら、楽しそうに付き合っていた。本当に有り難い存在だ。こういう時、私は全く役に立たない。たくさんの魚や野菜、

果物を買ひ込み、食べてと大声でしゃべり続けるだけだ。

自分の家族のことを長く書いてしまった。

実は、こういう状況にある自分が、「特別養護老人ホームふくら」の看取りケアについて聞くと励まされる。まさに我が事として、激励と大きな示唆を受けている。この看取りケアの取り組みが、単に人生の終末の場面のケアの思想だけではなく、これからのあるべき社会を照らしているような気がしてならない。

父から以前の遅しさが薄れ、「申し訳ない、すまない」が口癖となり、医師に何度も同じことや血液検査の結果を聞く姿を見るようになった時、ふくらの話を想い出す。「その人が生きて来た人生のリユックを紐解くことから始める」「長い間、社会の中で尊厳をもって活躍をしていた人」という、金森看護師の言葉を思い出す。いや、父と向かい合う時に、その言葉を思い出す様にしている。今は、弱そうに見える人だが、家族をしっかりと守り、どんな場面でも私たちが尊重し信じ抜いてくれた人であったことを。

ふくらの取り組みは、我が国の特別養護老人ホームのケアのあり方を本質的に問い直している。浅井東診療所の松井医師や宮地医師たちと連携しながら取り組むふくらの看取り

ケアは、これからのモデルだとさえ言われるようになった。また、新しい人材育成のモデルとも言える人も出てきた。人が天寿を全うするという現場の中に、実践から編み出した哲学と優れたチームワークがあれば、そこで働く職員も人として成長をすることが出来るといふ事実を突きつけている。

今年のアメニティーフォーラムに登壇した、厚生労働省の大島一博老健局長は、「北岡さんが理事長であることと、このふくらの取り組みは関係ないよね」、「理事長がダメでも素晴らしい実践が生まれ、素晴らしい職員が育つものですね」と笑いながら言った。本当にその通りである。「私が理事長だからです」というプライドも頭をかすめるが、山口所長を初めとして、矢部副所長、金森看護師、是洞看護師、中嶋支援課長、そして毎日現場でケアをしたり、送迎をしたりとそれぞれの役割を果たす職員がいて、それらの職員たちの取り組みの結果であることは間違いない。

人はそれぞれの人生を生きて行く。沢山の人と出会い、そこには色々な物語が生まれて行く。沢山の美しいものを食べ、色んなことを学んでいく。好きなことや嫌いなことが、いつの間にか心に沈殿し、夢中になることと出会っていくのだと思う。そういうことを積み重ねながら、人はそれぞれに与えられた人生を生きていく。そんなことを

父の姿を眺めながら、ふくらの取り組みに学びながら考える様になった。人の命には必ず終わりが来る。ふくらの取り組みがこの国に本当について良かったと思った。

今は弱い老人の姿に見える父だけれども、私や妹を育てるために一生懸命に働き続けて来た人である。そう考える様になったのは、ふくらの看取りケアの取り組みと金森看護師の言葉からである。人は誰でも自分の人生のリユックを紐解いてもらい、その中に詰まっている中身を、言葉に置き換え「褒められる」ことを願っていると思う。しかし、人は年老いて行くにつれて、自分が生きて来た素晴らしい人生さえも記憶が薄れ、自分への自信さえも失ってしまうのかも知れない。そしてそのことは、人生の終末に限らず人生の中であまり楽しさを見つけれなくなった時にも起こり得ると思う。

優しい社会を創りたいと思う。そのための福祉サービスでありたいと思う。ふくらの取り組みは、看取りケアだけに留まらず、人間への本質的な眼差し（思いやり）を示しているのだと思う。その眼差しには、美意識と優れた感性があるのだと思う。論理と科学に基づきながらも、美意識と優れた感性で豊かな世界を創りつつあるのではないかと思う。論理と科学だけでは平準化されてしまい、結果としてコスト競争の波に飲み込

まれ、人間らしさを失って行く中で、ふくらの取り組みはこれからの社会を照らすものだとさえ言える。

これからの社会で必要になるのは、この、美意識や感性ではないかと思える。論理と科学だけでなく、美意識と感性がもつと大切な社会、そういうことを証明している取り組みが、ふくらの看取りケアだ。それは、人の命と真摯に向き合う人たちから起きてくる風の様なものだと思える。その風を広くさらに大きく起こすことが、これからの日本の社会を強く魅力的な国にすることではないかと思うし、人は自分の命を持って、人に伝えるという法人理念を体現することなのかも知れない。ふくらの取り組みを知って、私はそう考える様になった。

私はこれからの残りの人生を、どんな形にしてリユックの中に詰め込んで行くのだろう。リユックの中に詰め込まれた自分の人生を、大切に紐解いてもらえる社会を作り上げて行きたいと思う。改めて、父の命に向かい合う勇気が生まれて来た。ありがとう。

父の手術はうまく行き、食欲旺盛だ。生きることは、食べることだと言わんばかりだ。これからも心配は尽きないが神様に感謝も言いたい。父もこれからもまだまだ続く自分の人生をリユックに詰め続けて行く。